



Title	遺伝カウンセリング来談時のメタ認知状態が不安レベルに与える影響 : 来談者の特性を踏まえた検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	柴田, 有花
Description	配架番号 : 2695
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(医学)
Dissertation Number	甲第14953号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85767
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	SHIBATA_Yuka_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（医 学）	氏名	柴 田 有 花
	主査	教授	田 中 真 樹
審査担当者	副査	准教授	朝 倉 聡
	副査	教授	工 藤 與 亮

学 位 論 文 題 名

遺伝カウンセリング来談時のメタ認知状態が不安レベルに与える影響
～来談者の特性を踏まえた検討～

(Effects of metacognitive status on anxiety level at genetic counseling visits based on the characteristics of clients)

申請者は、遺伝カウンセリング（GC）来談者が不安を抱くまでの思考プロセスに、心配や侵入思考といった精神障害に関するメタ認知信念が影響している可能性について検討した。不安状態には、状態・特性不安尺度を、メタ認知状態には、精神障害に関するメタ認知信念測定尺度（MCQ-30）日本語訳版を使用した。結果、GC前における来談者の状態不安は、血縁者である場合、家族歴がある場合、MCQ-30の下位尺度の1つである「心配の制御不能性や危険に関するネガティブな信念（ネガティブな信念）」が高い場合、の3つで高不安状態と関連し、状態不安を高める独立規定因子として、ネガティブな信念のみが選択された。また、来談者のメタ認知状態は、コントロール群とした一般成人と比較し有意に低い傾向にあった。来談者特性とメタ認知状態に関連はなく、メタ認知状態への介入効果はいずれの来談者特性を有する場合も同程度である可能性が示唆された。メタ認知状態と気質・性格特性の関連については、今後來談者の性格特性を調査することでGCを求めるに至る環境的要因を検討する一助となることが期待される。来談者の状態不安は、来談者特性よりもネガティブな信念に大きく依存することを示した結果からは、状態不安が高い集団に対してメタ認知を標的とした介入が有効である可能性が示唆され、GCにおける新たな心理社会的支援となる可能性がある。

審査にあたり、まず副査の朝倉准教授からMCQ-30日本語訳版の信頼性妥当性が十分でなく、本質問紙を使用し検討したことの有益性について指摘があり、申請者は、すでに国内で本質問紙を使用した研究報告があること、書籍に掲載されている質問紙であること、適切なプロセスで作成し、原盤作成者にも連絡をとっていることを作成者本人に確認できたことから使用するに至った旨を回答した。ただし、内容を改善する必要があると考えられたため、今後の検討課題であることを補足した。また、対象群とコントロール群で年代と性別分布割合が異なることについて指摘があり、この点は工藤教授からも同様の指摘があった。申請者は、MCQ-30日本語訳版の一般成人平均を導き出すことを優先し、両群で年代間・性別間に有意差がなかったことから、比較検討して問題ないと判断したと回答した。副査の工

藤教授からは、本論文結果の臨床現場での有効性について質問があり、申請者は、GC 来談者の不安状態にメタ認知状態が関連していることが明確になれば、状態不安が高いと判断された場合にその経緯を確認し、不適切なメタ認知が関連していると考えられた場合は思考スタイルの修正を目指すこと、ただし、GC の中で出来ることに限界があるため、心理専門家につなぐことも検討されると回答した。また、学位論文中の図の一部に説明を追記する必要があるとの指摘があった。最後に主査の田中教授から、遺伝学的検査後に GC に来談しない集団と性格特性の関連について質問があり、申請者は、GC に来談しない集団の中に不安状態に対する介入が必要な集団が存在する可能性があり、GC 来談者の性格特性を知ること、この集団への介入方法も併せて検討できると回答した。また、メタ認知状態と来談者特性に関連がないことから背景にかかわらず同等の介入効果が期待されたとした考察は飛躍しているとの指摘があり、申請者より、来談者特性を細分化して介入効果を検討することが必要であり、今後の課題としたいとの回答があった。また、不安や性格特性は国民性や文化により異なる可能性について指摘があり、まずは本邦からの報告を収集すると同時に、国際的な比較についても将来的に検討することが課題となった。

審査会で指摘された内容の一部に対応するために、学位論文にマイナーな修正を加える必要が生じた。一方で、この論文は、GC 来談者の不安状態をメタ認知的観念から考察した初の報告であり、今後は研究デザインを洗練することで、新たな GC 技法を開発する一助となることが期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。